

研究ノート

社会福祉教育におけるコンピテンシー評価項目の検討

Examination on the Evaluation of Competency in social Welfare Education

藤田 久美, 山本佳代子, 青木 邦男
Kumi FUJITA, Kayoko YAMAMOTO, Kunio AOKI

はじめに

平成18年度から本学部にて創設した「社会福祉学部総合研究プロジェクト(略称:総合研究プロジェクト)」が同年度に「平成18年度山口県立大学研究創作活動助成事業(基盤研究型B)」として新たな取り組みをはじめた。研究課題は「ソーシャルワーカー養成における〈現場体験と演習の総合的教育プログラム〉に関する研究である。筆者らが分担した研究は「社会福祉教育へのコンピテンシー評価法の導入のあり方」である。

コンピテンシー評価法の導入にあたって、「総合研究プロジェクト」の他の研究とすりあわせながら、これまでの社会福祉実習教育における学生の実態や教育方法を整理し、他大学の実践や研究も参考にしつつ、コンピテンシー評価項目を作成した⁽¹⁾。

コンピテンシー評価の導入の目的は、学生の成長過程や学習の深化の状況を客観的に把握することにより、実習教育の効果や教育方法の改善を行うことである。本稿では、本学社会福祉学部におけるコンピテンシー評価導入に向けての試みについて報告する。

1. コンピテンシーと社会福祉教育

1) コンピテンシーとは

コンピテンシー(competency)概念は1970年代ハーバード大学のMcClellandにより提唱された能力評価の概念で「成果を上げ続けることのできる行動特性」「再現性のある成果行動能力」を言う。Lyleらによれば「ある職務または状況に対し、基準に照らして効果的、あるいは卓越した業

績を生む原因としてかかわっている個人の根拠的特性と定義される⁽²⁾。産業界で多用されることが多く、わが国においても企業を中心に導入されている。高業績者の行動特性を分析し、その能力から必要スキルを抽出し、評価に活用するものである。この能力は、いわゆる学業的な知識や経験のみに頼るものではなく、心理面でのストレス耐性などメンタルの強さも含め、成果を上げるまでに発揮された思考や行動を客観的に評価するものである。社内の行動基準や人事評価制度に活用することで組織の生産性を高めることを目的としていることが多い。

小原はコンピテンス研究の流れを整理した上で、コンピテンスは「我々が自分のために設定した目標を達成するために、これまでの経験を生かして、環境の中で効果的に対処したり適応していくこと」を意味するとし、「個人的な側面だけでなく、社会環境や物理的環境の側面との相互作用の中で成長発達していく」と説明する⁽³⁾。その中でも自尊心、決定能力、判断力が重要であるとされ、環境に対して効果性を上げる個人的動機が重要要因と捉えられている。コンピテンス概念は自我心理学領域から発展したものであり、わが国では、心理、教育分野で論文が多く発表されている動向がある。

いずれにせよ、これらコンピテンシー、コンピテンスは概ね「能力」と説明される。しかし、両者でいう「能力」とは単に保持しているレベルに留まるものではなく、「卓越した業績を峻別する能力」である。人と環境との相互作用を通じ、継続的、安定的動機のもとで、その能力や資質が具

体的な行動として表出され、成果をあげていることがその根拠になると言えるであろう。

2) 対人援助サービス従事者のためのコンピテンシー

現在では、これらコンピテンシやコンピテンシーは、産業界のみならず教育、看護、福祉等の人的サービス分野においても、教育効果の測定や専門職の職業能力の指標として用いられている。

職業能力という観点では、医療専門職である看護師や保健師を対象としたコンピテンシー研究や福祉職である児童福祉司に求められるコンピテンシー等について、コンピテンシーモデルや評価項目の作成が行われている⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

Lyleらは、支援・人的サービスの従事者（たとえば看護婦、医師、教師、カウンセラーなど）を分析した一般的コンピテンシーモデルの特徴は、個人的効果性のコンピテンシーが多くを占めることであるとす。また、支援・人的サービス従事者は自分自身、自分の感性性、態度、信念などを仕事と一体化していること、さらに「人の育成」「チームワーク」「指揮命令」といったマネジメントコンピテンシーが重要視されていることも指摘する⁽⁶⁾。対人援助職は人間に対する身体的、精神的なケア等の提供による働きかけを行うものであり、与える影響も大きいと言える。実践では高い専門性が求められる場面が多々あり、個の能力は言うまでもなく、組織全体としての援助の質の向上を欠かすことはできない。それぞれの実践に即したコンピテンシーモデルを構築することは意義深いと考えられる。

これらは職務レベルに留まらず、養成課程である大学等においても導入が試みられている。看護系大学生を対象とした調査としては、知識・技術・能力に焦点を置いたコンピテンシー項目を用いた立石らの研究がある⁽⁷⁾。これは、①実習前後のコンピテンシー評価の比較、②卒業調査による、大学教育を通じて獲得したコンピテンシーの活用の実際について追究し、在学中の実習教育内容の向上をねらいとしたもので、養成課程における学

びと現場実践をつなぐ可能性を広げていくものであると言えよう。

3) 社会福祉教育とコンピテンシー

一方、ソーシャルワーク教育に用いたコンピテンシー・モデルは、1970年代後半のアメリカで開発が始まり、1980年代にカナダ、イギリス等に広がった。いまや中心的な教育モデルとなっており、我が国においては、2000年代より独自の評価項目作成へ向けた動きが始動したとされる⁽⁸⁾。

例えば、社会福祉士養成では、社会福祉士養成校協会の「社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究」において、学生の実習前後の評価システムとしてコンピテンシーを導入する試みについて、調査、分析を通じ、コンピテンシー項目を明らかにしている⁽⁹⁾。この中で、コンピテンシー評価制度を用いる意義として、①実習に行く学生の行動や意欲の把握、②学生自身、実習先スーパーバイザー、実習担当教員からの客観的な評価、③評価自体の客観性、④実習前後の評価による、学生の成果の上昇を可能とすることができ、社会福祉現場実習においての有用性を説明している。

また、池田は北星学園大学の社会福祉実習教育における自己コンピテンシ・アセスメント活用について報告している⁽¹⁰⁾。本学の予備調査として実施したコンピテンシー評価は北星学園大学のシートをベースとしたものである。これはソーシャルワーカーとしての専門的能力の獲得を目標としたコンピテンシー・モデルであり、北星学園大学では実習の事前事後指導に導入している。結果では、それぞれの項目は実習経験や授業を通し上昇したことを示し、コンピテンシ・アセスメントの活用は実習教育の到達目標の明確化と能力の到達度の確認、計画、実施、評価プロセスの自己学習、教育のふりかえりを可能にするものとして有意義であることを考察している。

このように、専門職養成を行う教育場面においてコンピテンシーが導入され始めており、各養成機関が理想とする専門職像に基づいたコンピテン

シーモデルの構築が試みられている。以下、本学でのコンピテンシー評価の導入プロセスについて述べていく。

2. 本学におけるコンピテンシー評価導入の取り組み（平成18年度）

1) 導入に向けての準備

(1) 目的

コンピテンシー評価の導入は多様な領域で用いられているが、実習教育という側面からみれば主に実習前後を通じて学生の客観的な変化の評価、教育目標の共通認識、教員・学生・現場指導者それぞれの立場からの教育効果の測定とふりかえりのためのツールとして活用されていることがわかる。

これらの教育効果を目指して、本学において平成16年度より学生の演習や実習教育の教育効果を試み、教育方法の検討を開始した。平成18年度は、16年に実施した予備調査の結果をもとに、本学実習教育を中心としたコンピテンシー評価のあり方について検討することを目的とし、概念整理と項目作成を行った。

(2) 予備調査の実施と検討

平成16年12月、北星学園大学で開発されたコンピテンス・アセスメントをベースとし、川崎福祉医療大学で修正された評価表を用いて調査を実施した。予備調査は、平成13年度入学生が、3年次の施設実習事前学習中に実施した。実施方法は、評価表を配布し、コンピテンシー評価の簡単な説明を行った後に、学生による5段階評定を行った。本来、コンピテンシー評価は、数回の評価をもとに、その変化を見ていくものであるが、予備調査では、1回のみ実施したものを、集計し、社会福祉実習会議で検討した。

次に平成18年9月に実施した、社会福祉実習会議のFDにおいて、評価結果を報告し、得られた情報をもとに、社会福祉実習会議において議論を行った。また、その後の学部プロジェクトの中で、「社会福祉教育におけるコンピテンシー評価の導入」として位置付け、他調査（卒後調査、学部内調査）の結果を含み、検討を行った。検討するにあたって、コンピテンシー評価のアセスメント項目を5つに分け、検討を行った。項目の構造は図1に示した。

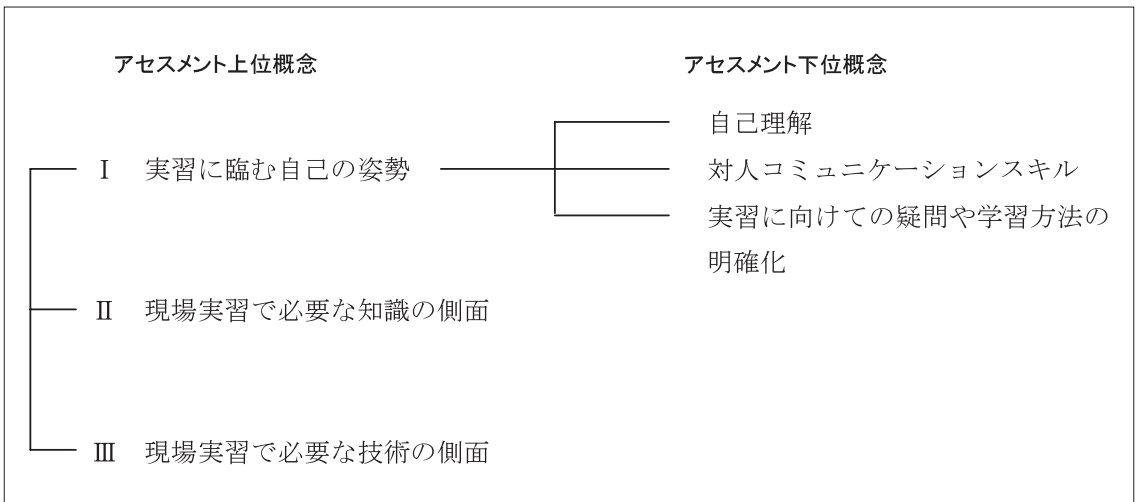


図1 アセスメント項目の構造

(3) 予備調査の結果

平成16年12月15日に実施した学生による項目評価の結果を以下に整理しながら、検討・議論された事項を報告する。自己コンピテンス・アセスメ

ント項目は表1で示すとおり、「Ⅰ実習に臨む自己の理解 (26項目)」、「Ⅱ実習で必要な知識の側面 (37項目)」、「Ⅲ実習で必要な知識の側面 (19項目)」の3本柱、計82項目から構成されている。

表1 コンピテンシー評価項目と結果

アセスメント項目	平均値
Ⅰ-1.実習に臨む自己の姿勢 <自己理解>	
①身体的姿勢(平素の自分の歩く姿や座る姿、立っている姿勢等がどのようなものを理解しており、他者にどのように見られているかをイメージできている)	3.4
②精神的構え(例えば、自分の性格・行動が、積極的か消極的か、明確か陰鬱か、楽観的か悲観的か、理論的か実践的か、などをきちんと把握しており、かつそれがプラス方面に現れている)	3.5
③自己の声質や話し方(例えば、自分の話し声が高いか低いか、早口かゆっくりか、歯切れよいかくぐもるか、鋭いか柔らかいか、話し役か聞き役か、などをきちんと把握しており、かつ状況に応じて適切に使い分けることができる)	3.5
④視線の質(例えば、他人の視線に合わせられるか合わせられないか、じっくり見る方かきよきよる方か、などをきちんと把握しており、かつ相手や状況に応じて適切に非言語コミュニケーション手段として使い分けることができる)	3.7
⑤服装の傾向(平素から時、場所、相手に合わせた清潔な服装ができており、事前訪問時や実習時にどのような服装を身につければよいかイメージできている)	4.1
⑥髪型の傾向(平素から時、場所、相手に合わせた清潔な髪形ができており、事前訪問時や実習時にどのような髪型にすればよいかイメージできている)	4
⑦持ち物の傾向(平素から時、場所、相手に合わせた持ち物を用意でき、事前訪問時や実習時にどのような持ち物がよいかイメージできている)	3.8
⑧時間に関する傾向(平素から、約束の時間は厳守し遅刻は殆どしない、あるいは提出物締切期限をきちんと守ることができる)	3.6
⑨自己の物事の判断傾向(例えば自分が、悲観的であるか楽観的であるか、自罰的か他罰的か、自己判断志向か他者判断(依存)志向か、利害的か理念的か、理論的か実践的か、物事にこだわる方かこだわらない方か、利己的か他愛的か、などをよく把握していて、日常の対人関係においてこれらの傾向をコントロールすることができる)	3.4
⑩自己覚知に努めている(上記のような性格傾向や自分の強み・弱みを客観視できるよう努めており、自己が他者にどのような印象を与えているかも分かっている)	3.4
Ⅰ-2.実習に臨む自己の姿勢 <対人コミュニケーションスキル>	
①自己紹介を的確にできる(相手、場面、時に応じて、自己に関する必要な情報を簡潔明瞭にはきはきと伝えることができる)	3.1
②相手より先に自己紹介ができる(自分と相手との関係～どちらが依頼者か、どちらが目上か～といったことを状況判断でき、適切なタイミングであいさつと自己紹介ができる)	3
③あいさつができる(時、場面、相手に応じた適切な挨拶を知っており、平素の対人関係の中でも実践できている)	3.8
Ⅱ. 現場実習で必要な知識の側面	
1. 実習先施設・機関の制度的成り立ちに関する知識を持っている(設置の根拠法令や専門職配置等の最低基準、財源や運恵について知っている)	2.6
2. 実習先施設・機関に関する統計的知識を持っている(実習先分野の利用者の動向、施設種別数の動向などを把握している)	2.4
3. 利用者に関する知識を持っている(実習先施設・機関を利用する(援助対象である)利用者の抱える問題(ニーズ)について理解し、そこから派生している様々な生活困難をイメージできている)	2.8

4. 実習先施設・機関の職員構成に関する知識を持っている（その現場とはどのような職種で構成されているのか、実習の際にどの職種の実習を行なうのか等について理解している）	2.8
5. 実習先施設・機関での援助に必要な知識を持っている（制度に関する知識、援助技術に関する知識、理念・原則に関する知識）	2.6
6. 実習先施設・機関の実践方法に関する知識を持っている（ソーシャルワーク（相談援助、ケアマネジメント）、介護、保育、ネットワークングなど、その現場でどのような援助方法が用いられているかを理解している）	2.5
7. 実習先施設・機関が立地する地域（市町村）の特性に関する知識を持っている（市町村の歴史・風土・文化・産業・人口動態（人口・世代別人口・丁々別人口分布・経年統計・世帯数・勤労就学による人口出入・将来人口推計等）、福祉計画等の有無、福祉資源の配置、利用者数、当事者活動、住民福祉活動など）	2.6
8. 実習分野や実習先の課題に関する知識を持っている（これまでの制度拡充の歴史や現状をきちんと把握し、今後の施策の方向を理解している。かつ、実習先施設がこれからどのような役割を果たしていくべきかをイメージできている）	2.5
Ⅲ. 現場実習で必要な技術の側面	
①利用者の課題について一般的に頭に描くことができる（実習分野の対象となる利用者の抱えている問題は何かをイメージできている）	3
②利用者のニーズをアセスメントできる（実習分野の対象となる利用者のアセスメントの枠組みや項目、アセスメントシートやツールがイメージできている）	2.6
③利用者との視線を合わせることができる	3.9
④利用者の話していることに耳を傾けることができる	4.1
⑤面接をするときに傾聴の（身体的）姿勢をとることができる	3.9
⑥面接において、うなずく、話を促がすなどの技法を使える	3.8
⑦面接において、質問を的確に使うことができる	2.8
⑧面接において、感情（気持ち）を的確に返すことができる	3
⑨面接において、要約の技法を使える	2.8
⑩面接において、話の焦点をつかむことができる	3
⑪面接において、話の焦点を移動することができる	2.7
⑫観察する際のポイントを頭に描くことができる	3
⑬そのポイントが意味する事を理解することができる	2.7
⑭利用者の家族と利用者への援助についてのコミュニケーションをとることができる	2.6
⑮利用者の家族が抱える課題についてイメージすることができる	3.1
⑯グループワークの理論を頭に描くことができる	2.8
⑰グループワークの運営の原則を頭に描くことができる	2.6
⑱グループに必要なプログラムを用意することができる	2.5
⑲グループのメンバーの動きを追うことができる	2.8
⑳実習先分野に必要なレクリエーションのレパートリーをいくつか持っている	2.6
㉑実習先組織の意思決定過程がどうなっているか	2.3
㉒チームアプローチの具体的方法	2.3
㉓利用者に自己の価値観で区別したり好き嫌いをなく接することができる	3.5
㉔利用者の利益を最優先に考えることができる	3.7
㉕秘密保持（守秘義務）が求められる理由を理解できる	4.4
8. 地域自立生活支援、契約利用、ICF、ノーマライゼーション、ソーシャルインクルージョン等の今日的な理念や考え方を踏まえた援助態度を取ることができる	2.9

①「実習に臨む自己の姿勢」について

評価点が3点未満であった項目は、「文章のやりとりを的確にできる（はがきや手紙、公的な文書の書き方・マナー・形式を理解しており、相手・時・用件等に応じて適切に作成することができる）」、「電話での応答を的確にできる（適切な尊敬・謙讓・丁寧語を用いて、適切な電話応対ができる。また、最小限の会話で必要な情報を収集することができる）」、「実習成功のための努力をしている（実習担当者と連絡をとり意思疎通を図ったり、事前訪問や予備実習的なボランティアを行なうなどして職員・利用者等との関係形成をはかり、実習の不安を少しでも減らそうと努力している）」であった。

また、全体的にみても、ほぼ全部の項目が3点台であった。4点台では、「髪型の傾向」「服装の傾向」の2項目のみであった。

これらの結果から、本学部の「実習に臨む自己の姿勢」としては、評価基準からいえば「備えているものと補充しなければならないものの程度が半々くらいである」ということになる。特に、3点未満だった項目として、電話や文章のやりとりという、社会人としての基本的なマナーや「話す」「書く」という基本的な技能の習熟度が低いことが理解できる。また、「実習成功のための努力」は、授業以外の自主学習や体験活動を行う力が弱いことが伺える。

②「現場実習に必要な知識の側面」について

8項目すべての項目が2点台であり、平均評価点が2、6点であった。配属先施設についての知識不足がうかがえる。調査実施時期の学習状況としては、実習の事前学習に位置付けられている「実習計画」の作成をすませ実習先の施設の機能や役割について理解する時期である。これらは、学生の学習態度や意欲との関連性もふまえなければならないが、指導時に「知識」に対して何をポイントとして学生に学ばせるかを明確にしておく必要があると考えられた。

③「現場実習に必要な技術の側面」の結果から

評価が低かったものとしては、すでに演習授業で経験した面接技法に関する項目のうち「的確な質問」「要約技法」「話の焦点化」といった具体的な技術であった。また、グループワークでは「運営の原則をイメージできる」「プログラムを用意する」等がいずれも2点台であった。これらは授業で学んだものの、それらを授業以外で実践する体験が不足していることや、項目で問われている内容がすでに学習したものであるという認識を学生が十分にもっていないことが考えられる。加えて、「利用者のニーズをアセスメントできる」、「実習先組織の意思決定過程」「チームアプローチの具体的方法」等も目前に控えた実習の中で経験することが予測され、学生の具体的なイメージと結びつかないことが考えられた。

(4) 予備調査をもとにした社会福祉実習会議における議論

社会福祉実習会議FDでの議論においては、予備調査結果をもとに、学生の実態について議論され、社会福祉実習に臨む前の、「社会人としての基本的マナーの習得不足」や「個々の学習課題の不明確さ」「実習に臨むモチベーションと学習意欲の向上」について課題が再確認された。また、これらの「実習に臨む前の自己の姿勢」としては、実習に特化されものではなく、本学部における1年次から4年次までの社会福祉教育全般にかかわってくるものではないかという議論がなされた。これらの見解をもとに、学部総合研究プロジェクトにおける他調査（卒後、学部、教員）の結果とすりあわせ、社会福祉教育において基盤となる「人間性」や「対人関係能力」の基本的な能力、ソーシャルワーカーとしての基本的な「価値」や「倫理」、社会人としても基本的なマナーなどについても加味していくことが提案された。

(5) コンピテンシー評価における評価概念の検討

予備調査及び各プロジェクトにおける検討をもとに、本学部の社会福祉教育におけるコンピテン

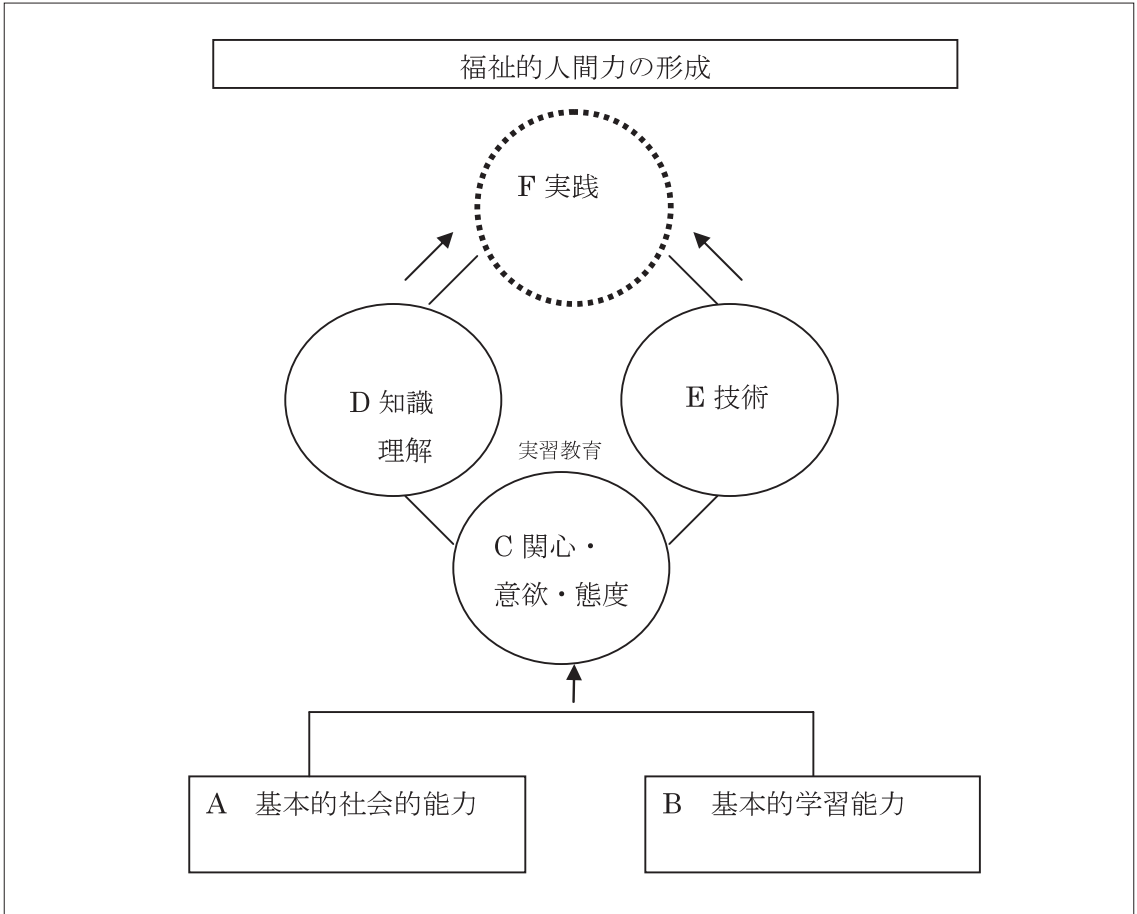


図2 本学におけるコンピテンシー評価のための概念図

A 基本的社会的能力	人としての基本的な能力及び社会的能力
B 基本的学習能力	大学生としての基本的なアカデミックスキルのもであり、社会福祉を学習する上での基本的能力となる「言語表現」「思考」「問題解決」を中心とした基本的な学習能力
C 関心・意欲・態度	社会福祉に関する学習意欲をもち、かつ、個々の関心をもちつつ、学習に臨む意欲や態度。社会福祉の諸問題の解決や個々の学習課題を明確化し、課題を解決するために、意欲的に学習に取り組むと共に、自主的に行動・実践する態度。
D 知識・理解	社会福祉の各分野に関する知識を身に付け、社会福祉の意義や役割を理解している。自分の実習先について知識をもち、理解し、説明ができるか。
E 技術	社会福祉の各分野に関する技術、ソーシャルワークに関する技術を身に付けている。演習・実習教育で学習する社会福祉実践に関する技術を身につけているか
F 実践	社会福祉に関する知識や技術を社会福祉実習や等の実践に活かすことができる。社会福祉に関する知識や技術を、日常生活の中で活かす事ができる。

表2 本学におけるコンピテンシー評価の概念整理

シー評価の導入について評価概念を作成した。
 予備調査で実施したアセスメントの上位概念を
 ベースにし、本学のこれまでの実習・演習を中心
 とした教育研究の課題や社養協によるコンピテ
 ンシー研究をふまえ、本学独自のコンピテンシー評

価概念を作成した。概念は、図2に示し、表2に
 概念説明をした。

また、新たな本学部の社会福祉教育におけるコ
 ンピテンシー評価項目については表3に示した。

表3 本学部における社会福祉教育におけるコンピテンシー評価項目

分類	No	項 目	評 定				
基本的・社会的能力	1	適切な（相手・場面・時に応じた）あいさつができる	1	2	3	4	5
	2	適切な（相手・場面・時に応じた）話し方ができる	1	2	3	4	5
	3	適切な（相手・場面・時に応じた）身なりができる	1	2	3	4	5
	4	適切な（相手・場面・時に応じた）文章のやりとりができる	1	2	3	4	5
	5	的確に自己紹介ができる	1	2	3	4	5
	6	時間厳守で行動できる	1	2	3	4	5
	7	自分の性格を理解できる	1	2	3	4	5
	8	自分の行動傾向を理解できる	1	2	3	4	5
	9	自分が他者に与える影響を理解できる	1	2	3	4	5
	10	自分を変革していく努力をしている	1	2	3	4	5
	11	心身ともに適切な状態を維持できる	1	2	3	4	5
	12	自分のストレスを解消できる	1	2	3	4	5
	13	困難な状況に耐えることができる	1	2	3	4	5
	14	同じ失敗を繰り返さず行動できる	1	2	3	4	5
	15	自分の行動に責任をもつことができる	1	2	3	4	5
	16	誰とでも協調性をもって接することができる	1	2	3	4	5
	17	相手の状況を汲んだ行動ができる	1	2	3	4	5
	18	人としての尊厳を守ることができる	1	2	3	4	5
	19	倫理的な行動をとることができる	1	2	3	4	5
基本的学習能力	1	講義や会話等のポイントを記録することができる	1	2	3	4	5
	2	事実と自分の意見を区別して記録することができる	1	2	3	4	5
	3	自分の意見を整理し、言葉で表現することができる	1	2	3	4	5
	4	プレゼンテーションを的確にすることができる	1	2	3	4	5
	5	文献や資料を収集するために図書館等を活用できる	1	2	3	4	5
	6	社会の問題に関心をもつことができる	1	2	3	4	5
	7	現状から問題を発見することができる	1	2	3	4	5
	8	問題意識をもって学習にのぞむことができる	1	2	3	4	5
関心 意欲 態度	1	学習や自主活動の進め方を自分自身の判断で決定することができる	1	2	3	4	5
	2	自分の関心領域を明らかにするために行動できる	1	2	3	4	5
	3	社会福祉問題に関心を持ち、文献・資料等を読むことができる	1	2	3	4	5
	4	自分の関心や課題にそった自主的活動（サークル、ボランティア、地域活動）を行うことができる	1	2	3	4	5
	5	自分の関心や学習課題を深め、より高い研究課題に結びつけることができる	1	2	3	4	5

知識・理解	1	社会福祉施設・機関の制度的成り立ちに関する知識をもち、説明できる	1	2	3	4	5
	2	社会福祉施設・機関に関する統計的知識をもち、説明できる。	1	2	3	4	5
	3	利用者に関する知識（利用者の抱えるニーズ、派生する生活困難のイメージ）をもち、説明できる	1	2	3	4	5
	4	社会福祉施設・機関における社会福祉専門職の担う職務に関する知識をもち説明できる	1	2	3	4	5
	5	社会福祉施設・機関での援助に必要な知識（制度、援助技術、理念・原則）をもち、説明できる	1	2	3	4	5
	6	社会福祉施設・機関での実践方法に関する知識（相談援助・ケアマネジメント・介護・保育・ネットワーキングなど）をもち説明できる	1	2	3	4	5
	7	演習・実習でかかわる地域の特性に関する知識（歴史、文化、人口動態、社会資源、住民福祉活動など）をもち説明できる	1	2	3	4	5
	8	演習・実習でかかわる施設・機関・地域・団体等の課題について知識をもち説明できる	1	2	3	4	5
技術	1	グループワークの理論に基づいて役割を果たすことができる	1	2	3	4	5
	2	地域の福祉課題に応じた企画・立案ができる	1	2	3	4	5
	3	レクリエーションの実践（企画・立案・実施）をすることができる	1	2	3	4	5
	4	面接において人の話を傾聴することができる	1	2	3	4	5
	5	面接において質問を的確に使うことができる	1	2	3	4	5
	6	面接において感情を的確に返すことができる	1	2	3	4	5
	7	面接において要約の技法を使うことができる	1	2	3	4	5
	8	記録を通じて自分・利用者の行動を振り返ることができる	1	2	3	4	5
	9	利用者を的確に観察できる	1	2	3	4	5
	10	利用者の個別性を尊重することができる	1	2	3	4	5
	11	利用者のニーズをアセスメントできる	1	2	3	4	5
	12	利用者の家族のニーズをアセスメントできる	1	2	3	4	5
	13	アセスメントに基づいた援助計画を作成することができる	1	2	3	4	5
	14	援助計画に基づいた実践をすることができる	1	2	3	4	5
	15	自分の実践結果に適切な評価をすることができる	1	2	3	4	5
実践	1	ソーシャルワーク実践に関する知識、具体的な実践理論、技術を理解し、実践することができる	1	2	3	4	5
	2	社会全体のニーズと社会問題について理解し、実践することができる	1	2	3	4	5
	3	利用者の抱える問題に総合的視点からかかわることができる	1	2	3	4	5
	4	学校や実習の場で、ソーシャルワークの専門性に基づいた実践をすることができる	1	2	3	4	5
	5	学校や実習の場で受けたスーパービジョンを専門性の向上に役立てることができる	1	2	3	4	5
	6	ソーシャルワークの価値と倫理について理解し、実践することができる	1	2	3	4	5
	7	人権、権利擁護について理解し、実践することができる	1	2	3	4	5

(6) 18年度検討のまとめ

本学の社会福祉教育におけるコンピテンシー評価の導入について検討するために、予備調査を実施し、概念整理及び項目作成を行った。検討過程では、本学の社会福祉実習教育の目標や教育内容に即したコンピテンシー概念及び項目を作成することを考慮し行った。そのために、予備調査の結果を素材とし、社会福祉実習会議で、「学生の実態」や「実習教育のあり方」などについて議論を重ねた上で、「北星大学」「社養協」のコンピテンシー概念及びアセスメント項目を参考にしつつ、本学部の社会福祉教育の目的及び実習教育の目的や教育内容に即した項目を考案していく作業を行った。

その結果、予備調査で用いた北星大学が考案したものをベースにしたコンピテンシー評価は、①実習教育に特化された内容である、②項目内容の表現が複雑である、③本学の社会福祉教育の特徴が示されていない、④本学の演習実習内容、実習目標のすべてが反映されていない、などの問題点があげられた。また、学部総合プロジェクトの調査研究結果から、本学の社会福祉教育の目標やあり方及びコンピテンシー評価の導入に関する意見・提案を受け、本学における社会福祉教育におけるコンピテンシー評価の導入の意義が再確認された。

3. 社会福祉教育へのコンピテンシー評価導入の試み(平成19年度)

社会福祉士専門職教育におけるコンピテンシー評価に関する先行研究及び報告書を検討して、暫定的に社会福祉教育に関するコンピテンシー評価項目を作成して予備調査を実施した。実習会議で本学の社会福祉演習や実習の教育目標や課題や現状を踏まえて、その予備調査結果を精査・検討し、本学独自の社会福祉士専門職に関するコンピテンシーの概念とコンピテンシー評価項目(案)を作成した。

そこで、新しく作成した社会福祉士専門職に関するコンピテンシー評価尺度を用いて、学部学生

の社会福祉士専門職に係わるコンピテンシーを測定し、評価項目の信頼性と妥当性の検討及び学生のコンピテンシーの現状を検討したので報告する。

1) 社会福祉士専門職に関するコンピテンシー評価尺度の信頼性と妥当性

新しく作成された社会福祉士専門職に関するコンピテンシー評価尺度は6つの構成概念(①基本的・社会能力、②基本的学習能力、③関心・意欲・態度、④知識・理解、⑤技術、⑥実践)に基づいて、それら構成概念を具体化した62質問項目によって構成されている。各質問項目には“1. とてもできる(5点)”から“5. まったくできない(1点)”の5段階評定(得点化)で回答を求めた。

この社会福祉士専門職に関するコンピテンシー評価尺度を用いて、学部学生2、3、4年生の計250人(2年生86人、3年生82人、4年生82人)を調査対象者として調査を実施した。調査データを因子分析を用いて解析し、評価尺度の因子の妥当性を検討した。因子分析の手法は因子抽出法として主因子法を用い、各因子間に相関があることが予測されるので回転は斜交解であるプロマックス回転を行った。因子数の確定には固有値、説明された分散の累計、スクリュープロットを基準にして理念的、経験的に説明が可能で妥当性の高い因子数を指定した。なお、解析にはSPSS 13.0J for windowsを使用した。

データの因子分析の結果、47質問項目より構成される6因子構造に収束した(表4)。抽出された6因子を質問項目の内容から①実践、②知識・理解、③技術、④学習・関心・意欲、⑤社会的能力及び⑥ストレス対処能力と命名した。したがって、仮説で指定した6構成概念は基本的学習能力と関心・意欲・態度が一因子に統合・抽出されて5因子に収束し、新たに1因子(ストレス対処能力)が加わった因子構造が見出された。6因子を構成する質問項目は①実践で12質問項目、②知識・理解で9質問項目、③技術で8質問項目、④学習・関心・意欲で8質問項目、⑤社会的能力で

表4 社会福祉士専門職に関するコンピテンシー評価尺度の因子分析（6因子構造）

因子名	因子	因子					
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
第1因子 ＜実践＞	アセスメントに基づいた援助計画を作成することができる	0.860	0.043	0.014	-0.144	0.035	-0.139
	援助計画に基づいた実践をすることができる	0.855	-0.052	0.051	0.004	-0.029	-0.142
	学校や実習の場で、ソーシャルワークの専門性に基づいた実践をすることができる	0.823	0.112	-0.089	-0.070	-0.007	0.189
	学校や実習の場で受けたスーパービジョンを専門性の向上に役立てることができる	0.766	0.161	-0.021	-0.022	-0.106	0.091
	社会全体のニーズと社会問題について理解し、実践することができる	0.759	0.060	-0.196	0.113	0.083	0.090
	ソーシャルワーク実践に関する知識、具体的な実践理論、技術を理解し、実践することができる	0.739	0.231	-0.119	-0.027	-0.060	0.179
	自分の実践結果に適切な評価をすることができる	0.724	-0.154	0.111	0.085	0.020	-0.083
	利用者の抱える問題に総合的視点からかかわることができる	0.723	0.054	0.008	0.020	0.033	0.030
	ソーシャルワークの価値と倫理について理解し、実践することができる	0.720	0.259	-0.067	-0.064	-0.014	0.048
	人権、権利擁護について理解し、実践することができる	0.666	0.083	0.049	-0.067	0.051	0.125
第2因子 ＜知識・理解＞	利用者や家族のニーズをアセスメントできる	0.623	-0.047	0.354	-0.014	-0.052	-0.157
	利用者のニーズをアセスメントできる	0.572	-0.002	0.356	0.003	-0.024	-0.063
	社会福祉施設・機関での援助に必要な知識（制度、援助技術、理念・原則）をもち、説明できる	0.023	0.880	0.072	-0.018	-0.080	0.065
	社会福祉施設・機関における社会福祉専門職の担う職務に関する知識をもち説明できる	0.049	0.842	0.015	-0.001	-0.049	0.066
	社会福祉施設・機関での実践方法に関する知識（相談援助・ケアマネジメント・介護・保育・ネットワークなど）をもち説明できる	0.130	0.811	0.100	-0.063	-0.108	0.052
	演習・実習でかかわる施設・機関・地域・団体等の課題について知識をもち説明できる	0.176	0.735	-0.014	-0.042	0.098	-0.060
	利用者に関する知識（利用者の抱えるニーズ、派生する生活困難のイメージ）をもち、説明できる	0.062	0.735	0.055	0.109	-0.085	0.022
	演習・実習でかかわる地域の特性に関する知識（歴史、文化、人口動態、社会資源、住民福祉活動など）をもち説明できる	0.159	0.734	-0.007	-0.089	0.129	-0.125
	社会福祉施設・機関に関する統計的知識をもち、説明できる。	0.033	0.726	-0.118	0.134	0.116	-0.103
	社会福祉施設・機関の制度的成り立ちに関する知識をもち、説明できる	-0.010	0.712	-0.094	0.198	0.115	-0.137
第3因子 ＜技術＞	地域の福祉課題に応じた企画・立案ができる	0.051	0.406	0.197	0.093	0.049	-0.152
	面接において感情を的確に返すことができる	-0.006	0.057	0.804	-0.041	-0.032	0.050
	面接において質問を的確に使うことができる	-0.081	0.051	0.720	0.132	0.038	-0.074
	面接において人の話を傾聴することができる	0.020	-0.097	0.705	-0.132	0.159	0.036
	面接において要約の技法を使うことができる	0.066	0.069	0.676	0.032	-0.080	0.042
	利用者を的確に観察できる	0.248	-0.034	0.558	0.034	-0.007	-0.055
	利用者の個性を尊重することができる	0.224	-0.051	0.558	0.019	0.032	0.145
	誰とでも協調性をもって接することができる	-0.225	0.148	0.504	-0.013	0.107	0.232
第4因子 ＜学習・関心・意欲＞	記録を通じて自分・利用者の行動を振り返ることができる	0.314	-0.140	0.417	0.190	0.065	0.030
	問題意識をもって学習にのぞむことができる	0.117	-0.117	-0.117	0.720	0.135	-0.118
	社会福祉問題に関心をもち、文献・資料等を読むことができる	-0.061	0.074	-0.156	0.671	-0.022	0.154
	自分の関心領域を明らかにするために行動できる	-0.091	0.037	0.240	0.666	-0.223	0.043
	社会の問題に関心をもちつづることができる	-0.064	0.097	-0.175	0.628	0.141	-0.071
	学習や自主活動の進め方を自分自身の判断で決定することができる	-0.166	-0.035	0.207	0.590	-0.045	0.178
	現状から問題を発見することができる	0.111	0.051	0.060	0.566	0.079	-0.100
	自分の関心や学習課題を深め、より高い研究課題に結びつけることができる	0.172	0.032	0.108	0.542	-0.082	-0.065
第5因子 ＜社会的能力＞	文献や資料を収集するために図書館等を活用できる	-0.119	0.133	0.069	0.538	-0.053	0.165
	適切な（相手・場面・時に応じた）話し方ができる	-0.134	0.167	0.232	-0.179	0.566	-0.028
	適切な（相手・場面・時に応じた）文章のやりとりができる	0.197	-0.091	-0.032	0.013	0.554	0.046
	適切な（相手・場面・時に応じた）あいさつができる	-0.181	0.085	0.348	-0.158	0.510	0.072
	自分が他者に与える影響を理解できる	0.014	-0.004	-0.087	0.155	0.500	-0.039
	適切な（相手・場面・時に応じた）身なりができる	-0.078	0.104	0.134	0.020	0.464	-0.055
	同じ失敗を繰り返さず行動できる	0.054	-0.082	0.082	0.048	0.449	0.134
	時間厳守で行動できる	0.006	0.004	-0.098	-0.031	0.426	0.204
第6因子 ＜ストレス対処能力＞	自分の行動に責任をもつことができる	0.068	-0.067	-0.014	0.295	0.402	0.169
	自分のストレスを解消できる	-0.015	-0.069	0.126	0.071	0.047	0.639
	心身ともに適切な状態を維持できる	0.167	-0.087	0.059	0.075	0.212	0.598

“因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法”

8 質問項目そして⑥ストレス対処能力で 2 質問項目であった。6 因子の信頼性係数（クロンバックの α ）は①実践で $\alpha=0.952$ 、②知識・理解で $\alpha=0.949$ 、③技術で $\alpha=0.884$ 、④学習・関心・意欲で $\alpha=0.848$ 、⑤社会的能力で $\alpha=0.757$ 、⑥ストレス対処能力で $\alpha=0.761$ であり、高い信頼性があると評価した。なお、ストレス対処能力は 2 質問項目で構成されており、因子の安定性、妥当性や信頼性で問題を残している。この因子の安定性、妥当性や信頼性をさらに高めるために少なくとも他の因子と同程度の質問項目で構成したい。今後の課題である。

2) 社会福祉士専門職に関するコンピテンシー評価の学年差

2、3、4 年生の間でコンピテンシー評価に差があるかをどうかを明らかにするために、2、3、4 年生の 3 群間で 1 要因の分散分析とボンフェローニ（Bonferroni）の多重比較を行った。その結果を表5に示す。

分散分析の結果、第 6 因子のストレス対処能力を除き、他の 5 因子（実践、知識・理解、技術、学習・関心・意欲、社会的能力）で有意差が見出された。第 6 因子のストレス対処能力に有意差が見出されなかったのは、この因子を構成する質問項目が 2 項目であり、測定感度が十分でなかったと考えられる。次に、ボンフェローニの手法によ

表 5 社会福祉専門職に関するコンピテンシー評価の学年差

		度数	平均値	標準偏差	F値	有意確率	多重比較結果
第 1 因子 (実践)	2 年生	84	26.92	8.05	62.112	0.000	2 年生 < 3 年生 < 4 年生
	3 年生	82	30.62	7.18			
	4 年生	80	39.14	6.11			
	合 計	246	32.13	8.79			
第 2 因子 (知識・理解)	2 年生	86	16.40	5.50	64.303	0.000	2 年生 < 3 年生 < 4 年生
	3 年生	82	18.84	5.34			
	4 年生	80	25.88	5.83			
	合 計	248	20.26	6.83			
第 3 因子 (技術)	2 年生	86	25.19	5.22	13.698	0.000	2 年生, 3 年生 < 4 年生
	3 年生	82	26.33	4.73			
	4 年生	82	28.99	4.43			
	合 計	250	26.81	5.05			
第 4 因子 (学習・関心・意欲)	2 年生	85	28.96	5.05	5.236	0.006	3 年生 < 4 年生
	3 年生	82	28.05	5.06			
	4 年生	82	30.61	5.30			
	合 計	249	29.20	5.22			
第 5 因子 (社会的能力)	2 年生	86	28.19	3.84	7.843	0.000	2 年生, 3 年生 < 4 年生
	3 年生	82	28.13	3.79			
	4 年生	82	30.12	3.37			
	合 計	250	28.80	3.78			
第 6 因子 (ストレス対処能力)	2 年生	86	6.38	1.84	0.893	0.411	
	3 年生	82	6.61	1.72			
	4 年生	82	6.76	1.92			
	合 計	250	6.58	1.83			

る多重比較の結果、実践と知識・理解の2因子で学年が上がることに有意な高い得点を示した。また、技術と社会的能力の2要因では4年生が2、3年生よりも有意な高い得点を示した。そして、学習・意欲では4年生が3年生よりも有意で高い得点を示した。すなわち、4年生は実践、知識・理解、技術、学習・関心・意欲及び社会的能力というコンピテンシーが2、3年よりも向上しており、3年生は2年生よりも実践と知識・理解のコンピテンシーが向上していた。

4年生は専門教育もかなり履修しかつ実習も終えているために、2、3年生よりもコンピテンシーが向上していることは当然の帰結と考えられる。裏返せば、本学部の専門教育や実習は社会福祉士専門職に関するコンピテンシーの向上を図り促進していると言えよう。ただ、この調査結果は横断的な調査結果であり、こうした因果関係の推定には縦断的な調査結果に基づく必要がある。また、専門社会福祉士専門職に関するコンピテンシー向上に影響を与えているカリキュラムの内容、すなわち基礎教養科目、専門教育科目、演習や実習等の影響度を明らかにする必要がある。本評価尺度の精緻化とともに今後の課題である。

おわりに

18年度からの取り組みにより、本学のコンピテンシー評価項目が精査されつつある。しかしながら、コンピテンシー向上に与える影響や本学独自の教育目標に照らし合わせた項目の検討は今後も続ける必要がある。本学の社会福祉教育にコンピテンシー評価を導入することによって得られる効果は、学生の自己評価だけでなく、社会福祉実習教育のあり方を検討するために非常に有効であり、かつ、社会福祉教育測定ソーシャルワーカーとして身につけさせたいスキル（技能）等の明確化、またコンピテンシーそのものが外部から観察可能な行動特性であるため、学生の自己評価をふくめ、教員、実習先の指導者が客観的な評価を行うことができる場所にあると考える。

また、本取り組みにあわせて、教員側も社会福

祉教育の目標及び社会福祉実習教育の目標を教員が共通認識し、学生に学ばせていきたいことや身につけてほしいことを明確化し、それらを十分に意識した教育内容を準備し、指導を行っていくことが課題となるだろう。コンピテンシー評価を用いるひとつの意義は、教員そして学生との学習目標を共有化させることである。したがって、教員自身が教育の目標や教育課程、各科目の相互関連性を理解し、教育に携わることが課題である。

引用文献

- (1)山口県立大学社会福祉学部,2007,「平成18年度研究創作活動事業・社会福祉学部総合研究プロジェクト報告書～ソーシャルワーカー養成における〈現場体験と演習の統合〉教育プログラムに関する研究」
- (2)ライルM, スペンサー～梅津祐良訳, 2003,『コンピテンシー・マネジメントの展開』生産性出版,p11
- (3)小原真知子,1997,「ソーシャルワーク実践の専門性に関する一考察: コンピテンス(Competence)概念からの検討」社会福祉38(日本女子大学社会福祉学科研究室編), p68～79
- (4)杉谷佐久良,2004,「看護師のライフヒストリーから見るコンピテンシーの獲得過程」神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録,No,29,p198・204,
- (5)東京都児童相談所編,2007,『児童福祉司のコンピテンシーモデル』ver.1.0,
- (6)ライルM, スペンサー, 梅津祐良訳,2003,『コンピテンシー・マネジメントの展開』生産性出版,p237-252
- (7)立石和子・吉本圭一,2006,「看護系大学生の職業的な能力(Competence)の自己評価-臨地実習前・後および就職後初期における比較検討-」九州看護大学紀要vol.8,No.1,p69-81
- (8)加藤恭子,2002,「アメリカにおけるコンピテンシー・ベースHRMの展開」経済集志 Vol.72,No.2, p433-447
- (9)社会福祉法日本社会福祉士養成校協会,2005,「平

成15年度社会福祉士専門教育における現場実習
指導教育に関する研究報告書」

- (10)池田雅子,2005,「社会福祉実習教育における学
生の自己コンピテンスアセスメントの活用につ
いて－コンピテンス評価結果の分析を通して」
北星学園大学社会福祉学部北星論集 (42), p49
－65

SUMMARY

Examination on the Evaluation of Competency in social Welfare Education

Kumi FUJITA

Kayoko YAMAMOTO

Kunio AOKI

This report shows innovation of competency of our faculty of social welfare.

The aim of evaluation competency is improvement in the Social welfare education effects, by understanding of student's development and condition of profound study objectively.

First of all, we conducted a self evaluation pre-test using a competency assessment model which was developed by University of Hokusei. Data were gathered from 80 students before the social work practice.

After fully discussion, we made original evaluation of competency item from these pre-tests results. The questionnaire is consisted 62 items of competency, which are academic skill, social skill, knowledge skill, professional skill, practice and enthusiasm toward "Development of Human social work competency". Then we researched self evaluation of competency which was targeting on 250 students from our faculty second, third, and fourth grade.

As a result, it was found that professional education and exercises of our faculty improve professional competency of social work education. However, it was revealed some further issues such as examining other factors which influence an improvement student's competency, apart from social work education.